福山大学

新入生にすすめる50冊の本

新入生にすすめる 50冊の本

2021

読書への誘い

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。新型コロナウイルスの年、2020 年に受験勉強をし、入学試験を受け、晴れて本学に入学されましたことを心からお慶び申し上げます。この 1 年は大学にとっても、対面授業、遠隔授業そしてハイブリッド授業とだれも経験したことのない 1 年間でした。このように、大きく変化する世界情勢だからこそ、その中の「ゆるぎないもの」もはっきりと見えてきます。その一つが『読書』です。

『新入生にすすめる 50 冊の本』は 2012 年度から開始され、2018 年度に青木美保前附属図書館長が現在の組織的な取組みにされました。2020 年度は全学部学科の学生から 47 名、教職員から 22 名の投稿がありました。新型コロナの影響もあって、必ずしも多い投稿数ではありません。しかし、一つ一つの投稿を見ますと、吟味された内容と執筆者の熱意が伝わります。ぜひ、手に取ってお読みください。

書評を書いた学生の多くは皆さんと同じ 1 年生です。この小冊子を読んでくださった皆さんが、来年の 1 年生へ、同様に読書へ誘ってくださることを期待しています。

福山大学附属図書館
館長　伊丹 利明

人生の道しるべ

自分の内面に光をあてて『自分の軸』を養う大切さを　小川祥二郎
『苦しかったときの話をしようか』森岡毅著　・・・・・・・1

自分だけの人生を生きる　小田丈琉
『アルケミスト』パウロ・コエーリョ著　・・・・・・・2

何のためにどう生きる？話題のアノ人流の読み方　佐藤理恵
『孔子』渋沢栄一著　・・・・・・・3

自他尊重のコミュニケーション　高橋佳美
『アサーション・トレーニング』平木典子著　・・・・・・・4

人間とは　中林大貴
『老人と海』ヘミングウェイ著　・・・・・・・5

成長したい全ての人への教科書　深井春香
『夢をかなえるゾウ』水野敬也著　・・・・・・・6

充実した大学生活を送ろう！　藤井香苗
『これからを生き抜くために大学時代にすべきこと』
許光俊著　・・・・・・・7

学びの道しるべ

考えるための第一歩　池内　葵
『自閉症の僕が飛びはねる理由』東田直樹著　……8

もっと早く読んでおきたかった一冊　大谷恭子
『思考の整理学』外山滋比古著　……9

大学での学びのヒントが見つかるかも知れない！　大塚　豊
『転換期を生きるきみたちへ』内田樹著　……10

読み書き上手は話上手のコミュ上手　喜多村侑佳
『読み上手書き上手』齋藤孝著　……11

お気に入りの詩を見つけよう　柴田紗知
『日本名詩選』西原大輔著　……12

「日本人とは何か」昔話から読み解く日本　髙原千穂
『日本の昔話』柳田國男著　……13

バブル経済の発生と崩壊という激動の時代を振り返る中で
歴史から教訓を学ぼうとする本　早川達二
『バブル』永野健二著　……14

コロナ禍の今こそ、論語　藤岡晴人
『論語物語』下村湖人著　……15

この本勉強になります！福大生が勧める危機管理の本　水口　晴
『そのツイート炎上します！』唐澤貴洋著　……16

その漢字、正しいですか？　村上　亮
『間違えやすい日本語実例集』講談社校閲部著　……17

文字を味わう　山本　覚
『文字に美はありや。』伊集院静著　……18

科学の道しるべ

環境史から感染症を見て、その先に見えるものは？　伊丹利明
『感染症の世界史』石弘之著　……19

宇宙からやってきた「トウモロコシ」　佐藤彰三
『世界史を大きく動かした植物』稲垣栄洋著　……20

新技術の正しい理解と社会生活の変化を考える本　田中始男
『誤解だらけの人工知能』田中潤，松本健太郎著　……21

深海の仕組みや生態系の謎が解ける本　藤田春希
『深海―極限の世界』藤倉克則，木村純一編著　……22

きっとあっという間に読み終えてしまう一冊　本多知佳
『野生動物は何を見ているのか』佐藤克文[ほか]共著　……23

事実に基づいて考える　松田文子
『Factfulness』
ハンス・ロスリング，オーラ・ロスリング，アンナ・ロスリング・ロンランド著
……24

「栄養学は人間学」栄養学の知識や技術を
生活の中で実行し応用することに尽力した偉人　吉田純子
『香川綾の歩んだ道』香川綾，香川芳子著　……25

文学の道しるべ

人を深く見る　青木美保
『店』石坂洋次郎，椎名麟三，和田芳惠著　……26

「絆」の大切さ　神原瑠璃
『名前探しの放課後』辻村深月著　……27

予想できないオチに「やられる!」こと間違いなし　久保田侑
『葉桜の季節に君を想うということ』歌野晶午著　……28

クリープハイプのボーカルが小説家デビュー　桑田成年
『母影』尾崎世界観著　……29

『変身』から考える生きること　小松優香
『変身』フランツ・カフカ著　……30

『羅生門』から学べること　榊原百那
『羅生門・鼻・芋粥』芥川龍之介著　……31

『キッチン』の人物の違い　徐　震東
『キッチン』吉本ばなな著　……32

謎解きミステリーで知る図書館司書のお仕事　髙原有美
『司書のお仕事』大橋崇行著　……33

『雪国』は、一面の銀世界であるのだろうか？　竹盛浩二
『名作うしろ読み』斎藤美奈子著　……34

灯台下暗し　縄田悠人
『アリス殺し』小林泰三著　……35

長いけどぜひ読んでもらいたい物語　福田響稀
『物語シリーズ』西尾維新著　……36

あなたの幸せはどこにありますか？　松島令磨
『また、同じ夢を見ていた』住野よる著　……37

何が正しいのか　松村明梨
『高校入試』湊かなえ著　……38

あずかり賃は一日百円です　山本菜摘
『あずかりやさん』大山淳子著　……39

回顧の夜　横田明日香
『一刀斎夢録』浅田次郎著　……40

複雑な気持ちとの葛藤　若槻愛美
『思い出のマーニー』ジョーン・ゲイル・ロビンソン著　……41

生き方が変わる本　渡見悠太
『坊ちゃん』夏目漱石著　……42

こころの道しるべ

美しき果実『檸檬』　井上辰貴
『檸檬』梶井基次郎著　……43

読んだ方が良い本　金尾　陸
『嫌われる勇気』岸見一郎，古賀史健著　……44

あの頃を思い出して。　髙尾朱里
『ペンギン・ハイウェイ』森見登美彦著　……45

人生、苦あれば楽あり。
偉人から学び、成長の糧にする。　竹田修三
『小説北里柴三郎』山崎光夫著　……46

願いを込めた花ゲリラ　光永鶴香
『春の旅人』村山早紀著　……47

高校生活最後を飾る行事「歩行祭」中に、
主人公の貴子が実行した〝賭け〟とは--。　峯松春菜
『夜のピクニック』恩田陸著　……48

“向き合う”とは　山﨑美憂
『レインツリーの国』有川浩著　……49

ミステリー作家が送る感動のストーリー　吉田圭佑
『ナミヤ雑貨店の奇蹟』東野圭吾著　……50

（備考：所属は令和３年３月現在です。）

自分の内面に光をあてて『自分の軸』を養う大切さを

『苦しかったときの話をしようか』
森岡 毅 著（ダイヤモンド社）

本書は著者が就職活動に臨む娘さんにむけて書かれた本です。マーケターとしてUSJの立て直しにも関与した著者がこれまでに感じたこと、多くの人を見てきた経験から、進学や就職など人生の選択に臨む世代に『自分を知ること』『社会が平等でなくてもどこにでも希望がある』強いメッセージを感じさせてくれます。私たちは突然の選択を迫られる事が多くあります。皆さんにとっても入試はその一つだったはずです。これから自分の専攻した学問を学んでいくことも大きな自分の武器になりますが、サークル活動や友達との交流など日常を通じて『自分を深く知ること』『自分の強み・弱み』など自己の内面への気づきを意識して生活していくことで自分という軸が形成され、それは必ず将来の就職や進学を決める時に大きな自信となると思います。是非本書を手に取って、これからの将来に明るい希望をもってもらいたいと思います。

小川 祥二郎（薬学部）

自分だけの人生を生きる

『アルケミスト　夢を旅した少年』
パウロ・コエーリョ 著（角川文庫）

この物語は、主人公の少年サンチャゴがピラミッドで宝物を発見する夢を見て、その夢に導かれながら旅をする中、様々な出会いと別れを経験し、人生の知恵を学んでいくものです。

誰でも若い時は自分の運命を知り、夢を見ることを恐れません。ところが、時が経つうちに、不思議な力により、自分の運命は実現不可能だと思い込み、自分の運命より他人がどう思うかの方が、大切になって諦めてしまいます。

少年は夢を求める旅の中で何度も決断を迫られます。それに対し、少年は「心の声」や「前兆」に従うことで、自分の運命を生きる道を切り開いていくのです。

この物語には、夢とは追い求めた結果が全てではなく、真剣に夢を追求する過程に本当の喜びや輝きがあるというメッセージが込められ、自分の人生を探求するヒントが多く散りばめられています。短い時間で読むことができ、新しい価値観と勇気を与えてくれる本なので、是非たくさんの人に読んでもらいたいと思います。

小田 文琉（人間文化学科１年）

何のためにどう生きる？話題のアノ人流の読み方

『孔子　人間、どこまで大きくなれるか』
渋沢栄一 原著，竹内均 編・解説（三笠書房）

2024年から新1万円札の肖像となる人物であり、2021年のNHK大河ドラマの主人公となった渋沢栄一。どんな人なのでしょう。

日本資本主義の父と呼称され、明治維新の変動期に挫折を繰り返しながらも自らの才気と頭脳で時代を切り拓き、日本最初の株式会社や近代的銀行の創設をはじめ、500以上もの事業を興して日本経済の基礎を築いた偉人です。その人が、自分の行動基準として座右の書としたのが孔子の『論語』でした。文中で、「人生でも仕事でも、どう判断してよいか悩むときがある。そんなとき『論語』の物差しに照らして行動すれば、絶対に間違いはないと確信している。」と説いています。本書は、渋沢流に著者自身の経験談、私見を踏まえて「論語の読み方」を力説しており、渋沢栄一の人柄や功績を知ることができるだけでなく、私たちに人生の色々な場面での物事の基本と実践方法の道しるべを示してくれていると思います。

コロナ禍中においても、渋沢流の読み方は、私に生きる力を与えてくれる教訓を熱く語っており、何回でも読み返し、論語を口遊み、実践するぞ！と思える一冊です。

佐藤　理恵（職員）

自他尊重のコミュニケーション

『アサーション・トレーニング
さわやかな「自己表現」のために』
平木典子 著（金子書房）

あなたは「アサーション」って聞いたことが有りますか？知っていますか？

アサーションとは、人との関わりの持ち方について、大きく３つに分けた時の内の一つのタイプの事です。私自身はじめてこの言葉を聞き、知ったのです。

３つのタイプとは、１つ目「自分よりも他者を優先する」（非主張的）、２つ目「自分のことを優先する」（攻撃的）、３つ目「１つ目と２つ目の黄金率といえる在り方」で、これが「アサーション」です。自分の思いを率直に表現しながら、さわやかな人間関係を築く、自分も相手も大切にするコミュニケーション方法なのです。

この本は、３つのタイプをいくつかの参考例で説明しています。自分が我慢するのではなく、相手にも我慢をさせず、お互いに気持ちの良い人間関係になるように、アサーションについて考えてみませんか？

髙橋 佳美（職員）

人間とは

『老人と海』
ヘミングウェイ 著，福田恆存 訳（新潮文庫）

老人の自然との闘い。そして人の生き方の指針になる話です。

漁師のサンチャゴ老人は 84 日間不漁が続いていました。漁師仲間にも馬鹿にされ、生活も貧しい。そんな中、ある日老人は「きっと今日こそは。毎日が新しい日なんだ」と言い、現状を打開するため諦めず漁に出ます。そんな老人は漁師仲間だけではなく、街のみんなからも蔑視されるように。ただ一人、少年マノーリンだけが老人を気遣い、食事などを差し入れます。老人にとって少年は心の支えになっていました。決意を固めて漁に出た老人は大物のカジキを発見し、数日間の格闘の末捕らえることに成功します。不漁を脱したかに見えたが、カジキの血の匂いにつられてサメが来てしまい、老人の必死の抵抗虚しく、やっと捕らえたカジキを食われてしまう。結局老人はカジキを持ち帰ることができず、不漁を解決することはできませんでした。それでも「人間は負けるようにできていない。殺されることはあっても、負けることはないんだ」と不屈の精神を感じさせるのです。

多くのものを失いながらも必死に生きる姿は勇敢で、その姿はきっと若い人に希望を与えてくれる。読む人によって解釈が変わる一冊。自分はこの本に力強さを感じます。

中林 大貴（人間文化学科 1 年）

成長したい全ての人への教科書

『夢をかなえるゾウ』
水野敬也 著（飛鳥新社）

この世の中には、成長したくてもそのためには何をすればよいのかわからない人が多い。この本は、そんな人たちへの成長のヒントが記されています。

主人公は、ある日突然「俺は人生を変える!」と無理やり有休を取ったにもかかわらず、何一つ実行に移せていなかった。主人公がどうしようか悩んでいると、ガネーシャという象に似た化け物と出会った。ガネーシャは過去に大きな偉業を成し遂げた偉人たちが通過した課題を、日常生活に取り入れることで解決を手助けしてくれようとしていた。しかし、主人公は自分自身の固定概念が邪魔をして、なかなか新しい知識を取り入れようとしなかった。しかし、その固定概念を捨てて人の教えを取り入れることで、自分の成長につながることに気づき、徐々に人の教えを取り入れるようになり、成長していった。

この本を読んであなたはどう感じたであろうか。この本をきっかけに、成長するヒントが見つかればいいと考えます。

深井 春香（人間文化学科１年）

充実した大学生活を送ろう！

『これからを生き抜くために大学時代にすべきこと』
許 光俊著（ポプラ社）

皆さんはどんな気持ちで福山大学に入学しましたか？また、これから始まる大学生活をどのように送りたいと思っていますか？

学業、サークル活動・部活動やアルバイトを頑張りたいと思っている人もいれば、人間関係や勉強についていけるか不安だという人もいるのではないでしょうか。そんな不安な気持ちを少しでも軽減させてくれるのがこの本です。大学での勉強法、人間関係、また恋愛術や就職など様々なテーマが書かれており、本書を読めばきっと充実した大学生活が送れると思います。

また、著者が「大学生の本分は迷うこと。徹底して迷うこと。迷う楽しさを知ること。こんなに迷うことが楽しめる時代は、たぶん将来、二度とない。」と述べているように、大学時代にしか味わえないことがたくさんあります。今しかできない経験（大学生活）を楽しむためにもぜひ一度読んでみて下さい。

藤井 香苗（職員）

考えるための第一歩

『自閉症の僕が飛びはねる理由』

東田直樹 著（角川文庫）

28 か国で翻訳されたこの本を書いたのは当時 13 歳の少年です。著者は「僕」として、自閉症の「なぜ？」に当事者として答えています。

「どうして目を見て話さないのですか？」「みんなといるよりひとりが好きなのですか？」「自閉症の人はどうして耳をふさぐのですか、うるさいときにふさぐのですか？」

一見、普通に思われる悩み事も自閉症の人たちにとっては大きな障害になり得ます。「普通の人」とは違う仕草をする「僕たち」は、どのような気持ちでそれを行うのでしょうか。会話が苦手な著者に筆談を見つけてくれた人のように、自閉症の子供たちの気持ちを汲み取ってくれる人もいれば、会話がうまくできない著者に迷惑だと言う人もいます。そして著者本人も、自分が迷惑をかけていることに悩むことがあります。自閉症や、それに限らず、多様化しつつある現代だからこそできる取り組みは必ずあります。

自分が知らない「だれか・なにか」を理解しようとするとき、それに意識を向けることが第一歩になるでしょう。

池内　葵（人間文化学科 1 年）

もっと早く読んでおきたかった一冊

『思考の整理学』
外山滋比古 著（ちくま文庫）

勉強というと、面倒で億劫なイメージがありました。それは、勉強しているつもりが、実は思考を狭めているだけの行動だったからかもしれません。

本書には、学びのコツが明快に描かれています。

思考をのびのびと巡らせるためには、「忘れる」ことも大事な要素だということ。「あとで」はやってこないので、とりあえず、やってみること、などなど。

一つのことにとらわれすぎず、広く興味を向けて、楽しいことを探求していくと、そこにヒントがあり、研究に繋がるのかもしれません。学びと遊びはとても近くて、つながっているようです。この本で簡単なコツがつかめれば、考えることが楽しく、贅沢な時間に思えてきます。

もっと早く読んでおきたかった、と思う一冊です。

大谷 恭子（職員）

大学での学びのヒントが見つかるかも知れない！

『転換期を生きるきみたちへ』
内田樹 編（晶文社）

私は内田樹(たつる)氏の文章が何となく好きで、家の書架にも何冊か並び、『AERA』誌のコラムはほぼ毎回目を通す。仏文学者で神戸女学院大の名誉教授にして武道家。合気道や居合道などの高段者で自ら道場「凱風館」を主宰。頭でっかちの思想家でないのが心地よい。

その内田先生が様々な分野の「信頼できる書き手」10人に依頼し、自らの「身体に訊く－言葉を伝えるとはどういうことか」と題する1章を含めて編まれた論集が本書。副題は「中高生へ伝えておきたいたいせつなこと」。それなら、今や大学生になった自分には関係ない、と思わないで欲しい。読み易く書かれていても、中身は私のような年寄りも、思わず「なるほど」と頷くアイデアに溢れている。

本の帯に書かれた「既存の考え方が通用しない時代で生き延びるための知恵と技術」のとあり、これから始まる大学生活で、自分は何を、なぜ学ばないといけないのかを知る手掛かりがたくさん詰まっている気がする。

大塚　豊（大学教育センター）

読み書き上手は話上手のコミュ上手

『読み上手　書き上手』
齋藤 孝 著（ちくまプリマー新書）

皆さんは本を読むのがお好きですか？私は好きですが、どちらかと言うと「苦手」な部類にいます。読み進めるのが人よりも遅いのです。また、読んだ内容を書き出す、アウトプットの作業は得意でしょうか…？

本書では、まず、社会で生きていく上で皆さんの想像以上に「読み書き」の力が必要とさせるという事実を述べ、「書く」時にはいかに「読みやすいか」を意識しなければならないこと、書くためにはまず読めないといけないなど、「読み書き」の基本的なルールが具体例を挙げてわかりやすく説明されています。

「読めているかどうか」の判断には、少なからず「書く／話す」というアウトプットの作業が必要であり、毎日の新聞チェックなど、日々読むという行為の訓練を行うことで、「書く」力も鍛えられるのだと、本書は語っています。

基礎編は前述の通りです。応用編である、具体的な訓練方法は、皆さんが実際に本書を読むことで身に付くのでは、と思います。

喜多村 侑佳（職員）

お気に入りの詩を見つけよう

『日本名詩選』
西原大輔 著（笠間書院）

詩は好きですか？あまり読む機会はないなぁという人も、恐らく歌詞という形でふれることは多いのではないでしょうか？詩には短い言葉で私たちの感情を揺さぶる力があると思います。

この本（3部構成）は明治から昭和にかけて発表された著名な詩とその解説が書かれています。詩にはその背景や作者の思いが凝縮されています。この本には詩とその解説が書かれていますので、まずは自分なりに解釈し、その後解説を読むことでより深く背景を理解することができます。私自身、詩には興味なかったのですが、学生時代にこの本の著者である西原先生の講義で詩の読み方や考察法を学び、詩の奥深さを知りました。その時に学んだ詩の中には今でも大切にしている作品もあります。

ぜひ皆さんもこの本を通して、自分のお気に入りの詩を見つけてみてください。

柴田 紗知（薬学部）

「日本人とは何か」昔話から読み解く日本

『日本の昔話』
柳田國男 著（角川ソフィア文庫）

この日本昔話集のうちに、「金の斧銀の斧」や「藁しび（べ）長者」など、ひとつやふたつあなたが聞いたことのある話があるかもしれない。それは少しも不思議なことではありません。なぜならそれは、私たちが幼い頃から常に耳にしていた話だからです。それらの話も改めて文章で読むと、その時とはまた一味違った印象を得ることができるかもしれません。

日本民俗学の創始者で、近代日本を代表する思想家でもあった柳田國男（1875～1962）は、名もなき庶民（常民）の歴史や文化を明らかにしたいと考え、「日本人とは何か」という問いの答えを探すため、調査旅行に出ました。昔話集はそんな彼が各地から収集した、日本人の心の郷と言えるかもしれません。

この本を読み、各地で語り継がれてきた説話に触れることで、あなたの知らない日本を再発見できるかもしません。これからの未来の担い手として、「日本人とは何か」日本人の神髄について考えてみてはどうでしょうか。

髙原　千穂（薬学部）

バブル経済の発生と崩壊という激動の時代を振り返る中で歴史から教訓を学ぼうとする本

『バブル　日本迷走の原点』
永野健二 著（新潮文庫）

これは 1980 年代後半のバブル経済を振り返り、教訓を導き出そうとする画期的な本です。高度経済成長、その後の安定成長を経て日本は急速な金融自由化・国際化を展開しました。バブル期に日本の一人当たり所得は世界一レベルに追いつき、日本経済はある意味でピークに達していました。株価と地価の上昇は銀行、証券会社の強気の経営を促し、企業は財テクで本業よりも稼ぐ場面を経験しました。1987 年の NTT 株の公開をめぐる大フィーバーは、バブルの熱狂が国民レベルにまで広がったことを示しました。1988 年に発売開始した栄養ドリンク「リゲイン」の CM ソングの中の「24 時間戦えますか」はバブル景気の雰囲気を反映していました。

バブル崩壊の影響が長期間続いた事実は、バブルの規模がいかに大きかったかを物語っています。失われた 10 年、20 年がもたらされた背景を学ぶことは、これからの日本経済のあり方を考える上でも大切だと思います。

早川 達二（経済学科）

コロナ禍の今こそ、論語

『論語物語』
下村湖人 著（河出文庫）

誰でも一度は耳にしたことがある論語、漢文で習う頃、原文は難解で読み下し文にするのが精いっぱいで内容を理解する余裕など殆どなかった記憶があります。

しかし、本書は論語の原文を題材にして、しかも忠実に物語として仕上げられた作品です。

論語は日本人の道徳観に大きな影響を与えています。その道徳観も現代社会にそぐわない点もあるかも知れませんが本書を読むと、きっと何か共感するものを見つけることができると思います。それは、時代と伴に薄らいでゆくといわれる道徳観・心の糧のように思えます。

本書は論語全文ではありませんが、孔子と弟子の様々な情景での対話から孔子の教えを記しています。話は短編で構成されており、どこからでも気軽に読むことができます。中には難解で禅問答のようなものもありますが、興味あるところから読むことができます。コロナ禍で先の見通しが難しい今こそ、少しでも孔子の教えに共感あるいは発見があれば幸いです。

藤岡 晴人（薬学部）

この本勉強になります!福大生が勧める危機管理の本

『そのツイート炎上します！
１００万回の殺害予告を受けた弁護士が教える危機管理』
唐澤貴洋 著（カンゼン）

私が皆様に薦める本は、唐澤貴洋氏の『そのツイート炎上します！100万回の殺害予告を受けた弁護士が教える危機管理』です。

この本は、インターネット上で炎上し、何度も誹謗中傷された経験を持つ弁護士・唐澤貴洋氏が、同じくインターネット上での誹謗中傷を経験したスマイリーキクチ氏、はあちゅう氏と共に、インターネット上の事柄やインターネットユーザーを分析・考察し、何故インターネットで炎上が起こったり、誹謗中傷がなされたり、デマが流れたりするのか、もし、誹謗中傷の対象になった際に、どのような行動を取るべきかを読み手に指南する本です。

この本は、これからインターネットと付き合っていく上で、どんなことに気をつければよいか、これからさらにインターネットと密接に絡んでいくこととなる私たちにとって、是非読んでおくべき１冊であると思います。

水口　晴（人間文化学科１年）

その漢字、正しいですか？

『熟練校閲者が教える 間違えやすい日本語実例集』
講談社校閲部 著（講談社文庫）

昨今ネットでニュースを見る機会が増えましたが、誤記を見かけることは少なくありません。よく見る間違いは「関わらず」の用法です。「結果に関わらず」なら正しいですが、「雨にも関わらず決行された」は誤りです。授業のコメントシートでは「講議」にお目にかかります。正確には「講義」ですね。

スマホやパソコンでの文章作成が習慣になってしまうと、漢字の用法を誤りがちになるのは私も同じです。それを正すために役立つのが、文章の専門家が間違いの多い事例を集成してくれた本書です。大学ではレポートや課題報告などの機会が増えます。国際化の時代に英語の能力は必須かもしれませんが、母国語を正しく書けることが大前提です。本書を糸口として日本語を書く際に注意深くなるだけではなく、一語一語の意味を考えながら文章を書く習慣、辞書をひく習慣が身につけば、おのずと日本語力も上がるでしょう。

村上　亮（人間文化学科）

文字を味わう

『文字に美はありや。』
伊集院静 著（文春文庫）

文字は情報を正確に記録し、それを伝達するために発明された記号である。古代中国で誕生した漢字は、亀の甲や動物の骨等に刻まれていたが、竹簡や木簡に墨で書かれるようになり、国家の統一によって地域ごとに発展した文字も統一された。さらに紙が発明され、漢字には美しさも求められるようになった。“王羲之”は行書、楷書、草書などの書体の良き文字の原型を完成させ、書を芸術の域に高めた人物として、現代でも書聖と称えられている。この本は、文藝春秋 2014 年 1 月号から 2017 年 4 月号にわたって連載された伊集院静氏の文字に関する随筆をまとめたものである。本書では書聖“王羲之”に始まり、日本三筆の 1 人“空海”、“ビートたけし”、書道ロボット“筆雄”まで、多彩な人物（？）の書が、時代背景や交友関係と共に紹介されている。美しい文字ばかりでなく、人間性があふれ出る味わい深い文字まで、『文字に美はありや。』という著者の疑問に最後まで答えはない。

40 話で構成される本書は、どの話から読んでも違和感なく楽しめる。各話が 10 分程度で読み切れるので、忙しいときの読書にお勧めしたい。

山本　覚（生物工学科）

環境史から感染症を見て、その先に見えるものは？

『感染症の世界史』
石 弘之 著（角川ソフィア文庫）

現在の新型コロナ禍の中で、医学研究者やウイルス学者が喧々諤々の論議中。さて、誰がこの現代的事象を人間の発達史や環境史とともに、歴史的事実として考察し、記録するのでしょうか？

本著は、新たな感染症は歴史の必然なのか？と問う。1980 年天然痘の撲滅宣言。1981 年ポリオの国内発生ゼロ。あたかも人類は疫病に打ち勝ったかのように見えた。しかし、その後、新興・再興感染症が続発。そして今や世界中が新型コロナで息を潜めている。そんな今だからこそ、感染症の歴史を人間社会の発展と環境の変化から読み解くと、その先には新型コロナの未来を見通せるかもしれません。

我々人間は原始生命から 40 億年を生き延びた子孫です。しかし、ウイルスも巧妙に生き延びた手練れのもの。この決着を予想してみては？

伊丹 利明（海洋生物科学科）

宇宙からやってきた「トウモロコシ」

『世界史を大きく動かした植物』
稲垣栄洋 著（PHP 研究所）

「トウモロコシ」について記載された第 13 章の副題は、「世界を席巻する驚異の農作物」と、なっています。そしてこの項の小見出しが、「宇宙からやってきた植物」です。

「トウモロコシは、人間の助けがなくては育つことができない植物。家畜のような植物で、宇宙人が古代人の食料として授けたのではないか。」と、植物学者が都市伝説を紹介。

食品として燃料として、その用途は広がり続け、世界中で栽培されるトウモロコシは、種が皮に包まれ、タンポポのように種を飛ばすことができず「もしかすると、トウモロコシが人間を利用しているのでは。」と筆者。

・ジャガイモ−大国アメリカを作った「悪魔の植物」
・トマト−世界の食を変えた赤すぎる果実

等々、14 種の植物が紹介されています。

一刻も早く『世界史を大きく動かした植物』の“陰謀”に、気付きましょう。

佐藤 彰三（経済学科）

新技術の正しい理解と社会生活の変化を考える本

『誤解だらけの人工知能
ディープラーニングの限界と可能性』

田中 潤，松本健太郎 著（光文社新書）

人工知能について疑問を感じている一般の人のために、人工知能の専門家へのインタビューに基づいて、具体例を示しながら、わかりやすく書かれた本です。

人工知能にできること、できないこと(2018 年時点での技術面の限界)、過去の人工知能ブームと現在の人工知能の技術的比較、将来の見通しと生活への影響などについても考察されています。

執筆時点（2018 年）から見て未来である 2020 年代、2030 年代、2045 年の人工知能について、生活への影響も含めた想像が述べられています。2020 年代は私たちにとっては現在です。著者らの想像と私達の見る現実との比較や評価ができます。2030 年代(10 年後)、2045 年(およそ 25 年後)に、どのような分野で人工知能が活躍しているか、そして、私たちの仕事や生活にどのような変化が起きているか等、著者らの想像の確かさを未来に検証するという楽しみ方もできる一冊です。

田中 始男（メディア・映像学科）

深海の仕組みや生態系の謎が解ける本

『深海—極限の世界
生命と地球の謎に迫る』

藤倉克則，木村純一 編著（講談社）

深海は温度も低く、日光もわずかしか入らない厳しい環境です。

こうした環境の中で、なぜ生物が生息できるのか、生物達のエネルギー源となるものは何なのか、深海の仕組みや深海の生態系について解説しています。

この本には、実際の深海調査の様子や流れなども記述されています。

深海や生物に興味のある人や、海について知りたいという人におすすめの一冊です。

藤田 春希（海洋生物科学科１年）

きっとあっという間に読み終えてしまう一冊

『野生動物は何を見ているのか　バイオロギング奮闘記』

佐藤克文［ほか］共著（丸善プラネット）

「バイオロギング」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？バイオロギングとは、野生動物に小型カメラや測定器を取り付けて生態・行動を調査する研究手法です。

この本ではウミガメ、マンボウ、オオミズナギドリ、マッコウクジラ、チーターを研究対象とし、その調査結果だけではなく、バイオロギングで野生動物に向き合う研究者たちの奮闘ぶりが語られています。「マッコウクジラにどうカメラを取り付けるの？」そう思いませんか？読めば分かります。この本からは野生動物を相手にする大変さも、この研究の魅力も、そして研究者の情熱も伝わってきます。

動物の生態や意外な一面を知ることが出来るのはもちろんのこと、調査中の出来事やハプニングも面白く書かれているので、読んでいてとても楽しいです。生物に興味がある方にはおすすめしたい一冊です。是非読んでみてください。

本多 知佳（海洋生物科学科１年）

事実に基づいて考える

『ＦＡＣＴＦＵＬＮＥＳＳ
10の思い込みを乗り越え、データを基に世界を正しく見る習慣』
ハンス・ロスリング他 著，上杉周作，関美和 訳（日経BP社）

私たちは、この１年あまり、新型コロナウイルス感染症に翻弄され続けてきました。正体がよくわからないまま、感染者数や死者数は、市県レベルでも、国レベルでも、世界レベルでも日々報道され、それに対してそれぞれのレベルで様々な対策がとられ、その対策の多くは、「早すぎた」「遅すぎた」「的外れ」等と批判されています。本書は、新型コロナウイルス感染症が私たちを脅かすようになる前に出版されたものですが、今の私たちにとってもなかなか示唆的です。

本書では、事実に基づいて（ファクトフルに）世界を見ることが必要なのに、私たちにそれがなかなかできないのはなぜかを、10 個の思考の癖を挙げてわかりやすく解説しています。「目の前の数字が一番重要だ」という思い込み（過大視本能）、「誰かを責めれば物事は解決する」という思い込み（犯人捜し本能）など、思い当たりますね。

松田 文子（心理学科）

「栄養学は人間学」栄養学の知識や技術を生活の中で実行し応用することに尽力した偉人

『香川綾の歩んだ道　現代に活きる実践栄養学』

香川綾，香川芳子 著（女子栄養大学出版部）

香川栄養学園の創始者である香川綾（1899-1997）は、明治 32 年、3 人姉妹の仲子として和歌山県で生まれました。師範学校を経て小学校の先生になりましたが、医者を志し東京女子医学専門学校（現：東京女子医科大学）へ入学しました。綾が所属した島薗内科学教室では、当時発見されたばかりのビタミン B_1 の実験が盛んに行われ、めざましい成果をあげていました。そのため、ビタミン B_1 を豊富に含む胚芽米を一般家庭に普及することは綾のライフワークとなりました。また、調味パーセントの提唱にはじまる綾の活動は、料理カードの作成、計量カップ・スプーンの開発など、多大な功績があります。若くして、父母、夫との死別など悲しいことが多かったにもかかわらず、4 人の子どもを育て上げ自ら信じた道を突き進む性格で、その生き方、考え方には感銘を受けます。今、壁にぶつかっている人に是非読んでもらいたいと思います。

吉田　純子（生命栄養科学科）

人を深く見る

『店』

石坂洋次郎，椎名麟三，和田芳惠 著（ポプラ社）

1 冊の本に、共通のテーマを持つ三編の短編小説が含まれているシリーズ本の一冊です。この巻は、職人を目指す青年の物語を集めています。三小説に登場する三人の若者はそれぞれ難しい人生を歩んでいますが、職人としての修行の中で、それを乗り越えていきます。

この三編の中で強烈な印象を残すのは、椎名麟三の「黄昏の回想」という小説です。主人公の若林は暴力的な父の下で恵まれない幼少期を過ごし、その後レストランのコック見習いとして自立しますが、どこでもひどいいじめにあいます。この小説に目が釘づけになるのはその若林が、自分をいじめる周囲の人々の視点に立って自分を眺めて周囲の人に共感し、自分をいじめる人達に愛を感じているところです。そこからは、不幸という共感でつながっている人々の群像が浮かび上がってきます。表面上の優しさを超えた、心の深いところで人間を理解する力が若林を救っていることを強く感じます。結局、相手を認めることが自尊心につながるということではないでしょうか。どんなにいじめられたとしても。

青木 美保（人間文化学科）

「絆」の大切さ

『名前探しの放課後』
辻村深月 著（講談社文庫）

主人公・依田いつかは突如、三か月前にタイムスリップしてしまう。記憶に残っている「――の遺体が、今朝、池の中に」という電話。名前のわからない「誰か」を探し、自殺を止めるため、いつかはクラスメートの坂崎あすなや友人たちに協力を頼む。いじめられ、自分の死亡記事を書く河野基が自殺しそうだと考えたいつかたちは、いじめをやめさせるため、原因となっていると思われる「水泳の苦手を克服する」という目標を立てる。ハプニングがありながらも練習を続け、基は五十メートルを泳ぎ切り、自殺はしないと言った。

そして迎えた一月十二日、三学期の始業式。本当の自殺の原因になった出来事が起こる。いつかたちはそれを回避することができるのか。本当の「自殺者」はいったい誰だったのか――。

最後に明かされる真実。絆と、驚きと、感動を、この本で味わってほしいです。

神原 瑠璃（人間文化学科１年）

予想できないオチに「やられる!」こと間違いなし

『葉桜の季節に君を想うということ』
歌野晶午 著（文春文庫）

成瀬将虎は「なんでもやってやろう屋」を自称し営んでおり、その名の通りガードマンやパソコンの講師、そして探偵など、実に様々な仕事を引き受けています。

ある日知り合った出身高校の後輩から、成瀬は１つの頼みを引き受けます。引き受けた「頼み」はやがて事件となり、そこからまた様々な事件へと繋がってゆき…。

将虎により事件は解決したかのように思ましたが、すっきりせず、将虎、更には読者である我々まで疑問を抱えることとなります。

将虎の周りで繰り出される事件の数々や、その渦中にいる人々の過去や状況に、読者は必ず驚くことになるでしょう。

久保田 侑（人間文化学科１年）

クリープハイプのボーカルが小説家デビュー

『母影』
尾崎世界観 著（新潮社）

尾崎世界観という名前を聞いたことがありますか？私がこの本を知ったのは、朝のテレビ番組で、「歌手の作品(小説)が芥川賞にノミネートされました。」というニュースがきっかけでした。2015 年に又吉直樹氏が『火花』で受賞したこともあり、これも読んでみたい、という衝動に駆られました。当初、単行本での出版はされておらず、最新作品が多く掲載されている、新潮社の『新潮』2020.12 月号を本学図書館で借りて読みました。

内容は、働くお母さんの姿をカーテン越しに子供目線で、感じ取る感性を詳細に映し出した作品です。一瞬、感じた匂い、感覚を事細かく見事に表現しています。

本文からその内容を一部抜粋します。

「お客さんが帰ってもう静かになったのに、まだ何かがうるさかった。それは私の心ぞうだった」「おじいちゃんの体から出るぼく汁のにおいが強くなって・・」

最後に、もう一つ読んで感じて欲しいのが、子供目線で書いた小説からか、ひらがな表記を主としているということ。

作者の優しさが伺えるような小説です。原稿用紙 150 枚程度の短編小説です。ぜひ挑戦してください。

桑田 成年（職員）

『変身』から考える生きること

『変身』
フランツ・カフカ 著，高橋義孝 訳（新潮文庫）

この本はある日突然虫になってしまった男の物語です。主人公のグレーゴル・ザムザは、ある朝目覚めると一匹の巨大な虫になっていました。家族は、突然虫になってしまったグレーゴルを見て驚き恐怖してしまいますが、妹は甲斐甲斐しくグレーゴルの世話をしてくれました。父は冷たかったですが、母は虫の姿を見ることは出来ずとも、グレーゴルを気に掛けていました。しかし、少し経った頃グレーゴルは母に見られてしまい、母を気絶させてしまいます。そして怒った父が投げた林檎が背中に刺さり重症を負ってしまいます。グレーゴルが虫のまま戻らず、唯一の働き手がいなくなった一家は父と妹が働きに出て、下宿人を入れることで生活を送っていました。しかし、またもグレーゴルが下宿人達に姿を見せてしまったことで契約解除されることになり、とうとう一家はグレーゴルを拒絶し、グレーゴルは孤独の中息を引き取るのです。

この物語を読んで、他者からの評価と自分の生きる価値というのを考えさせられました。

小松 優香（人間文化学科１年）

『羅生門』から学べること

『羅生門・鼻・芋粥』
茶川龍之介 著（筑摩書房）

この本は、主人公の下人が盗人になるという物語である。

下人は、生きるために盗人になるか、それとも餓死するかを悩んでいた。そのような時に盗人の老婆に出会い、盗むという行為を肯定される。これにより、自分の心の中で盗む行為を拒絶していた善の心はなくなり、盗みを働くことができた。

この本から学べることは、自分がやりたいと思ったことは自分の気持ちと肯定してくれる仲間がいればできるということだ。この本では、下人は盗人になる勇気を老婆からもらい盗人となった。これは、盗人になるという悪い方向には行ってしまったが、自分がやりたいことを老婆から肯定され、勇気をもらって行動に移すことができている。自分ひとりだけではなかなか勇気が出ないことでも仲間がいれば心強くなり、どのようなことでもできる。

この本を読んだ時にポジティブな感情を持つ人はあまりいないだろうが、そのような物語の中にも人生を豊かにするヒントを見つけてほしい。

榊原　百那（人間文化学科１年）

『キッチン』の人物の違い

『キッチン』
吉本ばなな 著（新潮文庫）

この小説は「過去から出る」ことを巡って展開される。みかげとえり子は過去に大きな打撃を受ける。えり子は性転換手術によって過去を捨てて新しい生活を始めることを選ぶ。一方、みかげは自分を過去の思い出に浸らせることを選ぶ。二人の出会いが似ているからこそ、えり子は正しいアドバイスをしてくれて、みかげは苦境から抜け出せる。小説の中で、「キッチン」に対する描写は二つある。一つは祖母のキッチンの描写で、一つは雄一家のキッチンの描写である。二つの台所の切り替えは、みかげが徐々に過去の「家」から出てきて、新しい家庭に溶け込み、新しい生活をスタートさせることを暗示する。そして、みかげを助けたからこそ、えり子の死後、みかげが雄一を助けて苦境から脱出する。前後に人物の立場が変わって、同じ事件に対する人物たちの態度の違いを示し、すべての人物をより立体的にする。しかも、『満月』では、みかげが雄一を助けることから、彼女の成長を感じることができる。

『キッチン』はいい小説である。同じ問題をめぐって、異なる人物の反応を描き、人と人の間に「過去」に対する認識の違いを感じさせることができる。

徐　震東（人間文化学科４年）

謎解きミステリーで知る図書館司書のお仕事

『司書のお仕事　お探しの本は何ですか？』
大橋崇行 著（勉誠出版）

図書館司書の「貸出・返却」以外の仕事って具体的に何をしているのでしょうか。「司書の具体的な仕事内容」を、怖くないミステリー風ライトノベル仕立てに描かれています。

本屋さんから届いた１冊の本が書架に並んで、利用者が読めるようになるまでの作業、大変だけれど楽しいイベント企画といった、図書館司書の様々なお仕事を、公共図書館の新人司書・双葉の目線から見ていくお仕事小説です。

インターネット全盛時代に、変わりつつある調査方法や、イベントの企画・立案から学校図書館との現実的な連携など、図書館司書の仕事の見えている部分だけでなく、「見えない部分」も描かれています。

コラム形式で図書館の専門用語や知識の説明もわかりやすく紹介されています。

本の貸出・返却以外の、図書館の使い方のヒントが知りたい人におすすめの１冊です。

髙原　有美（職員）

『雪国』は、一面の銀世界であるのだろうか？

『名作うしろ読み』
斎藤美奈子 著（中公文庫）

川端康成『雪国』の書き出しは、「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。」 である。この書き出しはみんな知っている。これだけで雪国の一面の銀世界をイメージし、『雪国』を読んだつもりになっている。

しかし、その次の一文、「夜の底が白くなった。」では、イメージは直ちに書き換えられる。「夜」だから、トンネルを出ると漆黒の闇なのである。かすかな雪明りで、列車の窓の下の雪だけがほの白く浮かび上がっている。これが「夜の底」である。書き出しの一文だけでは、間違ったイメージが固定されてしまう。

『雪国』の「うしろ読み」を読んでみよう。最後の一文は、火事の場面、「踏みこたえて目を上げたとたん、さあと音を立てて天の河が島村のなかへ流れ落ちるようであった。」である。「夜の底」と「天の河」との対照のなかでの、冬の「天の河」の淡く繊細な心象風景がある、と言う。

「うしろ読み」は、じつに奥深くおもしろい。本書は、『坊っちゃん』から『ハムレット』まで、古今東西の名作 132 冊を、最後の一文から読み解いている。

竹盛 浩二（大学教育センター）

灯台下暗し

『アリス殺し』

小林泰三 著（創元推理文庫）

不思議の国のアリスとミステリーの組み合わせに、普通のミステリーとは違う魅力を感じてこの本を手に取りました。

大学院生・栗栖川亜理は、最近不思議の国に迷い込んだアリスの夢ばかり見ている。どうやらその夢の世界の死と現実の死は繋がっているらしい。不思議の国では、三月兎と頭のおかしい帽子屋が犯人探しに乗り出していたが、思わぬ展開からアリスは最重要容疑者にされてしまう。アリスの潔白を示すため、栗栖川は同じ夢を見ている同級生の井森建と共に様々な協力者の力を借りながら、事件の核心に迫っていく。

しかし、夢の世界で女王から事件の捜査官に任命された頭のおかしい帽子屋らに言いがかりをかけられ、事件調査を邪魔されてしまう。それでも、現実世界での谷丸警部たちの捜査と夢の世界でビルが残したダイイングメッセージにより、栗栖川は事件の真犯人に辿り着いたのである。

この本をもう一度読み返してみると、1 ページ目から真犯人の名前が出てきていることに気づき、驚かされました。加えて、夢の世界の住人たちの話の通じなさが、不協和音のような気持ち悪さを醸し出していて、読んでいて言いしれない恐怖を覚える面白さがこの本にはあると思います。

縄田 悠人（人間文化学科 1 年）

長いけどぜひ読んでもらいたい物語

『物語シリーズ』
西尾維新 著（講談社 BOX 文庫）

とある町の高校生、阿良々木暦は突如街に出現した瀕死の吸血鬼を助けたことが原因で、半分吸血鬼半分人間という存在になってしまった。助けた吸血鬼は怪異の王であり、街の霊的エネルギーを乱し怪異を呼び寄せてしまう。阿良々木暦は、怪異に取り憑かれた人達と出会い、それらを助けて人間的に成長していく…。

西尾維新がノリノリで書いたと言われている本シリーズ作品。著者の別作品『掟上今日子の備忘録』はドラマ化されたが、『物語シリーズ』はシリーズアニメや映画化により有名になったので、あまり知らないという人も多いと思います。この作品はミステリー要素に加えてコメディ要素も強く出されており、見ている者を飽きさせないどころか満足感さえ感じさせるような内容となっています。

私が１番強くおすすめするのは、作中で登場人物が言う名言です。この『物語シリーズ』は心に響く名言が多く生まれており、老若男女誰もが共感できるようなシーンが魅力的です。

福田 響稀（人間文化学科１年）

あなたの幸せはどこにありますか？

『また、同じ夢を見ていた』
住野よる 著（双葉社）

主人公は小学生の小柳奈ノ花という女の子です。彼女は、学校に友達がいません。しかし、一匹の猫に出会ったことにより、彼女の生活は一変します。かっこいい「アバズレさん」、いつも優しい「おばあちゃん」、傷をもった「南さん」といった、様々な過去を持つ女性たちとの出会いや別れが描かれ、少し不思議な日常と、とても綺麗な世界観のファンタジー作品になっています。

私がこの作品の中で特に共感したことは、「幸せ」を見つけるために奮闘する奈ノ花の人物像です。彼女は、「幸せとは何か？」を見つけるために、様々な場所へ行き、たくさんの人と関わっていきます。その答えを、登場人物たちが様々な形で提示してくれます。

大学という場所の中にも、様々な場所、たくさんの人がいます。考え、行動することが多いかもしれませんが、皆さんも、4年間の大学生活で、自分なりの「幸せ」を見つけることが出来たらいいなと思います。

松島 令磨（人間文化学科 2 年）

何が正しいのか

『高校入試』
湊かなえ 著（角川書店）

この本は、教師の視点で書かれており、高校入試を舞台に、様々な事件が起こるという物語です。

高校入試の前日に、教室の黒板に「入試をぶっつぶす!」と書かれた張り紙が貼られているのを、教師が見つける所から物語がスタートします。この他にも様々な事件が起こる中で、高校入試を採点も含めて無事に終わらせるために、教師たちは誰が何の目的で事件を起こしているのか考え、協力しながら事件を解決しようと努めます。掲示板の書き込みや受験生の親、次々と事件を起こす犯人に邪魔をされながらも、何とか犯人を見つけ出します。

全体的に現在の学校の問題点が浮き彫りになった物語です。高校入試はもちろんのこと、記憶に新しいセンター試験にも被るような内容であったため、その時の緊張感を思い出し、受験生の思いに共感する部分もありました。また、匿名での心ない言葉が数多く出てくる場面があったので、発信する際の危険を再認識し、注意が必要だと改めて感じる物語になっています。

松村 明梨（人間文化学科１年）

あずかり賃は一日百円です

『あずかりやさん』
大山淳子 著（ポプラ文庫）

皆さんは「もの」の気持ちになったことはありますか？

この物語は、「あずかりや」の暖簾やガラスのショーケース、「あずかりや」に持ち込まれる「もの」が主人公で、それぞれの持ち主に対して疑問や悩みを持っています。時には、「もの」の持ち主の両親との死別や離婚、持ち主本人の家庭環境の崩壊など、家族関係の複雑さによって、「もの」の運命が変わり、悩みがより複雑になってしまうこともあります。しかし、あずかりやの主人や、持ち主の会話を通して、持ち主の「もの」へ対する思いを知ることで、「もの」の悩みの解消、また、家族関係の修復までされていきます。

この物語を読んでいくうちに、人生は何が起こるかわからなくて、様々な出来事を経験していくけれど、必ず何かしらの「もの」が自分に関わっていて、「もの」が味方の場合もあるとわかります。

子供の頃に言われた「ものを大事にしなさい」という言葉の深意とは？誰が読んでも心が暖かくなる『あずかりやさん』を読んでみてはいかがでしょうか。

山本 菜摘（人間文化学科１年）

回顧の夜

『一刀斎夢録　上・下』
浅田次郎 著（文春文庫）

時は幕末動乱期。日本史史上最も大きな時代の変革期と言っても過言ではない。

梶原中尉は夜な夜な老人の家へ昔話を聴きに行く。「飲むほどに酔うほどに、かつて奪った命の記憶が甦る」そう語ったのは、元新撰組副長助勤・3番隊隊長の斎藤一。戊辰戦争で多くの仲間を失い、なぜ自分だけが悲惨な状況下にあるのかと、失意の底にいた。「死場所」を求めていた彼の前に同じ思いを抱えていた元隊士の久米部が現れる。「死するは易く、生くるは難い。殺すは易く、生かすは難い。」かつて孤高の剣士で“鬼”と言われた男の一言はどこか重く、胸に刺さる。残酷な現場を目の当たりにして来た彼だからこそ言えた一言なのかもしれない。

この物語はあくまでフィクションではあるが斎藤一の目線で語られる話はとてもリアル。幕末維新史から生命の哲学を学べることのできる一冊。

横田 明日香（人間文化学科１年）

複雑な気持ちとの葛藤

『思い出のマーニー』
ジョーン・ゲイル・ロビンソン 著，高見 浩 訳（新潮文庫）

これは、主人公が孤独から解放される瞬間を見守る話である。

主人公アンナは幼いころに両親を失った悲しみ、世の中の大人に対する不信感、喘息の発作の辛さを感じて生きている。その暗闇からの解放を求めるかのように、夢の中でマーニーという少女に出会う。

マーニーは社交的で明るかった。二人が打ち解けていくうちに、アンナはマーニーに心を開き、孤独から解放されていく。孤独から解放されつつあるアンナは、周囲の大人にも徐々に心を開きつつあったが、心をふさぎ込む癖があり、素直になれず、なかなか本心をさらけ出せずにいた。

しかし、アンナが、夢で出会ったマーニーが自分のおばあちゃんだったことを知ることで、家族の存在を感じ、孤独から解放されるシーンがある。私は、アンナのこの姿は心を閉ざしていた時の姿と比べると、心が明るくなったと感じ、感動した。

誰にでも苦悩を感じる瞬間はある。そんな時に自分自身と向き合い、葛藤している健気な少女の姿を見て、元気をもらってほしい。

若槻 愛美（人間文化学科１年）

生き方が変わる本

『坊ちゃん』

夏目漱石 著（小学館文庫）

『坊ちゃん』という作品は、主人公が教師という職で対人関係に苦労している。職場の人間や生徒に翻弄されるが、悩みを自ら抱え込まずしっかりと話を聞いてもらうことでなんとか教師をしている。生徒にからかわれる主人公もおもしろいが、主人公が同じ職場の教師を見下しているところもおもしろい。

大学生になり知らない土地、慣れない環境で新生活を始める１回生の時に、悩み事や困ったことなどがあったときは、誰かを頼る必要性を感じさせてくれる。

本を読むことでさまざまな感性を磨くことができるが『坊ちゃん』はそのひとつでもある。『坊ちゃん』を一度読んだことがある人はもう一度、読んだことがない人は一度読んでみることで自分の価値観が変わったり、さらに深まったりすることができる作品のひとつである。是非一度手に取って読破することをおすすめする。

渡見 悠太（人間文化学科１年）

美しき果実『檸檬』

『檸檬』
梶井基次郎 著（新潮社）

日々暮らしていく中で、陰鬱さや憂鬱さを持つことは誰にでもあることだと思います。特に若者の私たちが大きく共感できることだと思います。この話は“得体の知れない不吉な塊”に押さえつけられている“私”が果物屋でふと見かけた、檸檬によって心が動かされていく物語です。

主人公である“私”は、何か不吉な塊に終始押さえつけられていました。みすぼらしいものが好きな“私”はある日の夜、汚らしい果物屋を見つけました。そこで檸檬を買うと何だか不思議と心が晴れるような気がしました。平常避けていた本屋の丸善に入り、画集を手に取りました。しかしつまらない“私”は色彩のある本を重ねてその上に檸檬を載せました。さらにこのまま出て行こうと言うアイデアを思いつき、店をあとにしました。“私”はそれを眺め、あの檸檬が爆発したらどんなに面白いのだろうと思うのだった――。と言う内容です。

僕は、一つの美として檸檬を挙げたことがとても面白いところだと思いました。比喩というより、檸檬そのものの良さが描かれていると言った方がいいと思います。是非読んでみてください。

井上 辰貴（人間文化学科１年）

読んだ方が良い本

『嫌われる勇気』
岸見一郎，古賀史健 著（ダイヤモンド社）

僕は、新入生にすすめる本として『嫌われる勇気』を挙げます。『嫌われる勇気』は、現代でありがちな人間関係の悩みについて語った本で、哲人と青年の会話方式で本の内容が進んでいきます。

原因論、目的論、課題の分離、承認欲求の否定など普段聞かない言葉がたくさん出てきますが、それぞれ分かりやすく説明されているので、誰でも読みやすい本だと思います。本の中に、「課題の分離」という言葉が出てきます。これは誰の課題なのか？という視点を持ち、自分の課題と他人の課題を分離し、他人の課題には一切介入しないようにするという考え方です。つまり、自分のコントロール出来る事(自分の課題)は一生懸命やるが、コントロール出来ない事(他人の課題)は考えることさえしてはいけないよ、という事です。自分のコントロール出来ないところまでも自分で解決しようとするから、人間関係に悩む事になるという考え方です。

僕が説明しても分かりにくいと思うので、ぜひ手に取って読んでみて欲しいです。

金尾　陸（人間文化学科１年）

あの頃を思い出して。

『ペンギン・ハイウェイ』
森見登美彦 著（角川文庫）

主人公は小学 4 年生のアオヤマ君。舞台は丘がなだらかに続く郊外の街。森見作品では珍しく京大生が主人公でも京都が舞台でもありません。ただ、このアオヤマ君は普通の小学 4 年生ではありません。

「ぼくはたいへん頭が良く、しかも努力をおこたらずに勉強するのである。だから、将来はきっとえらい人間になるだろう。」

冒頭二文でわかるアオヤマくんの人間性。この時点では生意気な小学生だと感じる人もいるかもしれませんが、読み終わるころにはアオヤマくんのことがきっと大好きになるでしょう。「僕は泣かないのです」というアオヤマくんに、切なくて愛しくて、寂しい感情を抱くでしょう。そしてこの本をぎゅっと抱きしめ、自分のあの頃に思いを馳せて、もう一度ページをめくるのです。

『ペンギン・ハイウェイ』は爽やかで、どんなに小さなことでもキラキラして見えたあの頃を思い出すような小説です。大学生という少し大人に近づいた今だからこそ読んでほしい一冊です。

髙尾 朱里（人間文化学科 1 年）

人生、苦あれば楽あり。
偉人から学び、成長の糧にする。

『小説北里柴三郎　ドンネルの男』
山崎光夫 著（東洋経済新報社）

みなさんは、将来、あらゆる場面で活躍する可能性を秘めています。しかし、その可能性という「芽の開花」には、周りの人・環境からのサポートが必要になります。その一つが福山大学です。そして、みなさんは「偉人の軌跡を学ぶこと」が大切です。

紹介する本の主人公は、北里柴三郎博士です。多くの偉業をなしていますが、破傷風菌の発見とその治療法の確立は特筆すべきであり、第一回のノーベル生理学・医学賞にもノミネートされています。北里博士は、受賞こそ逃しましたが、生涯にわたって医学を極め、後世に名を馳せる多くの医学者を育てました。しかし、博士の人生は決して順風満帆なものではなく、努力、挫折、また努力、また挫折を経たのちに、結実した成果を挙げています。

北里博士の成功の裏には多くの人々との関わり合いがあり、「人は一人では育たない。人が人を育てる」というメッセージが込められていることに気づくと思います。

竹田　修三（薬学部）

願いを込めた花ゲリラ

『春の旅人』
村山早紀 著（立東舎）

皆さんは花ゲリラというものを知っていますか？花ゲリラは公園や空き地にこっそり花の種や球根を埋めたりすることを言います。ここでは、花ゲリラを題材にストーリーが進んでいきます。

この本のあらすじは、主人公・里奈の親友である桃子ちゃんがある日クラスのいじめっ子の女の子に嫌われてしまいます。しかし、里奈は自分までいじめられるのが怖くて桃子ちゃんを無視してしまったのです。そんな時、里奈の母の実家の二階の部屋を借りている学生の 1 人であるさゆりさんから「里奈ちゃんがわたしがバラの花みたいに強いって思うなら、里奈ちゃんの心が“わたしはバラみたいな人になりたい”って思っていることなんだよ」と言われます。そしてその帰り道に、里奈は自分の意志で桃子ちゃんの家の前の道ばたにクロッカスをそっと大事に大事に埋めました。桃子ちゃんが幸せと感じてくれるように。

この本では文字だけでなくイラストも有り小説を読むのが苦手な人でも簡単に手に取ることが出来ます。

光永 鶴香（経済学科 1 年）

高校生活最後を飾る行事「歩行祭」中に、主人公の貴子が実行した〝賭け〟とは--。

『夜のピクニック』

恩田陸 著（新潮社）

私が選ぶ新入生の皆さんにすすめたい 1 冊は、恩田陸さんの『夜のピクニック』です。

この物語の舞台は主人公が通う高校の伝統行事「歩行祭」です。大学へ入学して間もない新入生の方にとって高校を舞台にした物語は共感しやすい内容ではないかと考え、この 1 冊を選びました。

全校生徒が夜を徹して 80 キロ歩き通すという「歩行祭」の様子が主人公の視点から語られたり、主人公の内に秘めた思い、葛藤が丁寧に描かれたりと、読み進めていくうちに読者自身も一緒に歩いているような感覚になる物語展開が特徴的で、ページ数 455 ページと文庫本にしては厚めではありますが、その分読み切った後の達成感はひとしおです。

物語中の他愛ない会話や、クラス中、学校中に流れるゴシップなど、学生らしさのあふれた描写も多く、さらさらと読めるところもおすすめな点です。もともと読者好きな方にも、大学に入って読書に励みたいと思っている方にも是非読んでもらいたい 1 冊です。

峯松 春菜（人間文化学科 3 年）

“向き合う”とは

『レインツリーの国』
有川 浩 著（新潮文庫）

貴方は、いつも周りの人にどのように接しているだろうか？人としっかり向き合うことは、相手にとっても自分にとってもとても重要なことなのである。

この物語の主人公は、健常者が、聴覚障害を持つ女性とどのように接し、どのように向き合うことが必要であるのか、ということで悩んでいました。

主人公の会社の同僚は、主人公の悩みや葛藤、現状を聞き、その話から女性の気持ちや想いをくみ取り、主人公に助言をした。そのおかげで、きちんと向き合い、お互いのことを理解しようとしていた矢先、歩いている二人をカップルが追い抜かそうとし、カップルの男性の方が聴覚障害を持つ女性を突き飛ばし、そのことで主人公とカップルが口論になり、女性を無意識に傷つけることへと繋がってしまいます。

しかしそれから、しっかりお互いの意見を言い合い、女性の聴覚障害を二人の問題とし、女性が前向きな姿勢に変わっていったのです。

この本を読むことで、周りの人ときちんと向き合うことの大切さに気付くことができ、人との接し方に変化が訪れ、自分自身の成長に繋がると思います。

山﨑 美憂（人間文化学科１年）

ミステリー作家が送る感動のストーリー

『ナミヤ雑貨店の奇蹟』
東野圭吾 著（角川文庫）

東野圭吾といえば、日本を代表するミステリー作家だ。しかし、今回紹介したいのはもっぱらミステリーではなく人情味に溢れたストーリーだ。

ここで一つ、今私の紹介文を読んでくれているあなたに質問したい。あなたは自身の周りの人々をどのように捉えているだろうか。この本を読み終えると、あなたの周りの人々がいかにあなたの人生に大きく関わっているか、その人たちを大切にしていかなければならないことが痛烈にわかる。

施設育ちの主人公３人(敦也、翔太、幸平)が人生に切羽詰まっている際、あるきっかけで始めた手紙のやり取りを通じて心を入れ替えていく。それらの要因には、彼らが育った丸光園という施設、ナミヤ雑貨店の元店主・浪矢雄治の働きが大きく関わっている。

誰だって１人では生きられない。得意ではないような、嫌いな人がいたとしても、何らかの形で自分の人生に影響を及ぼしてくれているのだ。だとすれば、普段なかなかできないが、周りの人への感謝の気持ちはやはり絶やしてはならない。

吉田 圭佑（人間文化学科１年）

推薦図書リスト

『FACTFULNESS：10の思い込みを乗り越え、ﾃﾞｰﾀを基に世界を正しく見る習慣』
ﾊﾝｽ・ﾛｽﾘﾝｸﾞ,ｵｰﾗ・ﾛｽﾘﾝｸﾞ,ｱﾝﾅ・ﾛｽﾘﾝｸﾞ・ﾛﾝﾗﾝﾄﾞ（日経BP社，2019年）

『ｱｻｰｼｮﾝ・ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ：さわやかな〈自己表現〉のために　改訂版』平木典子
（日本・精神技術研究所，2009年）

『あずかりやさん』大山淳子（ﾎﾟﾌﾟﾗ社，2015年）

『ｱﾘｽ殺し』小林泰三（東京創元社，2019年）

『ｱﾙｹﾐｽﾄ：夢を旅した少年』ﾊﾟｳﾛ・ｺｴｰﾘｮ（角川書店，1997年）

『一刀斎夢録<上>』浅田次郎（文藝春秋，2013年）

『思い出のﾏｰﾆｰ』ｼﾞｮｰﾝ・G.ﾛﾋﾞﾝｿﾝ（新潮社，2014年）

『母影』尾崎世界観（新潮社，2021年）

『香川綾の歩んだ道：現代に活きる実践栄養学』香川綾，香川芳子
（女子栄養大学出版部，2008年）

『感染症の世界史』石弘之（KADOKAWA，2018年）

『ｷｯﾁﾝ』吉本ばなな（新潮社，2002年）

『嫌われる勇気：自己啓発の源流「ｱﾄﾞﾗｰ」の教え』岸見一郎，古賀史健
（ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞ社，2013年）

『苦しかったときの話をしようか：ﾋﾞｼﾞﾈｽﾏﾝの父が我が子のために書きためた
「働くことの本質」』森岡毅（ﾀﾞｲﾔﾓﾝﾄﾞ社，2019年）

『高校入試』湊かなえ（角川書店，2013年）

『孔子：人間、どこまで大きくなれるか〔新装版〕』渋沢栄一，竹内均
（三笠書房，2000年）

『誤解だらけの人工知能：ﾃﾞｨｰﾌﾟﾗｰﾆﾝｸﾞの限界と可能性』田中潤，松本健太郎
（光文社，2018年）

『これからを生き抜くために大学時代にすべきこと』許光俊（ﾎﾟﾌﾟﾗ社，2010年）

『思考の整理学』外山滋比古（筑摩書房，1986 年）
『司書のお仕事：お探しの本は何ですか?』大橋崇行（勉誠出版，2018 年）
『自閉症の僕が跳びはねる理由』東田直樹（KADOKAWA，2016 年）
『小説北里柴三郎：ﾄﾞﾝﾈﾙの男』山崎光夫（東洋経済新報社，2020 年）
『深海−極限の世界：生命と地球の謎に迫る』藤倉克則，木村純一，海洋研究開発機構（講談社，2019 年）
『世界史を大きく動かした植物』稲垣栄洋（PHP 研究所，2018 年）
『そのﾂｲｰﾄ炎上します！：100 万回の殺害予告を受けた弁護士が教える危機管理』唐澤貴洋（ｶﾝｾﾞﾝ，2019 年）
『転換期を生きるきみたちへ：中高生に伝えておきたいたいせつなこと』内田樹編（晶文社，2016 年）
『名前探しの放課後<上>』辻村深月（講談社，2010 年）
『ﾅﾐﾔ雑貨店の奇蹟』東野圭吾（KADOKAWA，2014 年）
『日本の昔話 新版』柳田国男（角川学芸出版，2013 年）
『日本名詩選<1> 明治・大正篇』西原大輔（笠間書院，2015 年）
『化物語<上>』西尾維新（講談社，2006 年）
『葉桜の季節に君を想うということ』歌野晶午（文芸春秋，2007 年）
『ﾊﾞﾌﾞﾙ：日本迷走の原点』永野健二（新潮社，2019 年）
『春の旅人』村山早紀，げみ（ﾘｯﾄｰﾐｭｰｼﾞｯｸ，2018 年）
『百年文庫<２７> 店 』石坂洋次郎，椎名麟三，和田芳惠（ﾎﾟﾌﾟﾗ社，2010 年）
『ﾍﾟﾝｷﾞﾝ･ﾊｲｳｪｲ』森見登美彦（角川書店，2012 年）
『変身 改版』ﾌﾗﾝﾂ･ｶﾌｶ（新潮社，2011 年）
『坊っちゃん』夏目漱石（小学館，2013 年）
『また、同じ夢を見ていた』住野よる（双葉社，2016 年）
『間違えやすい日本語実例集：熟練校閲者が教える』講談社校閲部（講談社，2018 年）
『名作うしろ読み』斎藤美奈子（中央公論新社，2016 年）
『文字に美はありや。』伊集院静（文藝春秋，2020 年）

『野生動物は何を見ているのか：ﾊﾞｲｵﾛｷﾞﾝｸﾞ奮闘記』
　佐藤克文，青木かがり，中村乙水，渡辺伸一（丸善ﾌﾟﾗﾈｯﾄ，2015 年）
『夢をかなえるｿﾞｳ』水野敬也（飛鳥新社，2007 年）
『読み上手書き上手』斎藤孝（筑摩書房，2008 年）
『夜のﾋﾟｸﾆｯｸ』恩田陸（新潮社，2004 年）
『羅生門・鼻・芋粥　改版』芥川龍之介（角川書店，2007 年）
『ﾚｲﾝﾂﾘｰの国：World of delight』有川浩（新潮社，2009 年）
『檸檬』梶井基次郎（角川書店，2013 年）
『老人と海　改版』ﾍﾐﾝｸﾞｳｪｲ（新潮社，2003 年）
『論語物語』下村湖人（河出書房新社，2020 年）

新入生にすすめる50冊の本 2021
2021年4月1日発行

編集・発行
福山大学図書館運営委員会図書館企画部会
〒729-0292
広島県福山市学園町1番地三蔵
福山大学附属図書館